

## カエルグラス

麗澤瑞浪高校 P N 小竹 ひさ

ある晴れた日曜日。

私はフリーマーケットで変わったグラスを見つけた。その店の主人曰く、「カエルグラス」というらしい。なんでも、海外の腕利きのガラス職人が作ったもので、少々デフォルメされたカエルの形が愛らしく、且つ持ち主に忠実だという。

特に傷や欠けは見当たらない上に、店主も自慢気に説明してくれたので、何故売ってしまっただろうと気になった。尋ねると主人は、気が合わなかったのだと残念そうにため息をついた。

何のことかよく分からなかったが、私はグラスを買ってしまった。

店主は上機嫌で私に手を振りながら、懐から携帯用ボトルを出して中のウイスキーをぐいっと呷った。

使っているうちに、段々とただのグラスではないと感じ始めた。少し目を離すと飲み物が減っている気がするのだ。

決定的だったのは、梅ジュースを注いだ時だった。婆ちゃんは一人暮らしはじめた私に、毎年梅シロップを送ってくれる。それを炭酸水で割って飲む梅ジュースは、まさに絶品だ。

その梅ジュースをカエルグラスに注ぎ、シロップと炭酸水を冷蔵庫に仕舞って戻ってくると、グラスの中身が半分程減っていた。明らかにおかしい。

私は変だなと思い、グラスを見つめた。カエルの、ちょうど目のところを、じっと、見つめた。少し間があつて、ふいっと目を逸らされた。グラスに、である。

「あんたが飲んだの？」

我ながら成人がグラスに話しかける様子はメルヘンとはかけ離れているように感じられたけれど、確認する方法が他に思い当たらなかった。

グラスの目がきよときよと動き、けろっ、と小さな声が返ってきた。その様子が叱られた子供そのものだったので、私は思わず噴き出してしまった。

くすくす笑いが止まらず、私は笑いながら冷蔵庫に向かった。梅ジュースを注ぎ足さなくては。

その日から、カエルグラスのために私は飲み物を少し多めに用意するようになった。

カエルグラスはなかなか可愛い奴だった。私の喉の渇き具合を感じし、ちょうど良いタイミングでやって来る。そのとき中身もないとだめだと気づいたカエルグラスは、どうやったのか自分で飲み物を入れてぴよぴよ跳ねてくるようになった。当然通ったあとにはびしゃびしゃで中身もほとんど残っていないのにも関わらず、カエルグラスが誇らしそうにするので、私はまた

もや嘖き出してしまった。

その次からは溢さないよう這って来るようになったカエルグラスを、私は微笑ましく思った。

寝苦しい程暑い夜のこと。

私は柵からカエルグラスを取り出した。カエルグラスは寝かけていたらしく、突然のことに驚いていた。カシッと爽快な音。缶ビールだ。カエルグラスに注ぐと白くなめらかなメレンゲが柔らかに蓋をつくった。

何かつまみになるものはないかと台所を漁っていると、自室の方で物が落ちるような音がした。

何事か、と慌てて様子を見にいくと、部屋の中はひどい有様だった。カエルグラスを置いた机の上が妙にすつきりとしており、その周辺に物が散乱している。山のように積んであった書類も床でばらばらになり、何かの液体で濡れている。

カエルグラスは机の上で、くわんくわんと回転していた。台風のような。床に転がった物たちは、おそらく台風と化したカエルグラスの直撃を受けたのだろう。

私はぼかんとしてしばらく動けずにいた。

台風カエルグラス号は、机に残っていた置時計に接近する。危ないつ。すぐさま駆け寄ったが遅かった。ぶつかつた置時計と、勢い余つたカエルグラスが落下する。反射的に手を伸ばす。置時計の針が動くのが見える。カエルグラスは私の指先を掠めて——そのまま落ちてゆく。一瞬見えた顔が、赤い。カエルグラスが、音を立てて碎ける前、最期に一声、鳴いた。

「びいっ」

私はその場にへたり込んだ。

そういえば、グラスを買った店の主人は酒が好きそうだったなあ、とぼんやり思った。